

大門寺境内（十二社権現跡）測量調査概要報告

坂田 典彦・木村 健明

1. はじめに

大門寺は、茨木市北部、安威川右岸の山中に所在する真言宗御室派の寺院であり、神峯山大門寺と号する（図1）。寺伝では、宝亀2年（771年）に桓武天皇の兄とされる開成皇子が創建したと伝えられる。境内の西側に位置する十二社権現（図2）の解体作業中に、基壇中央の石室（註1）から墨書が認められる礫（以下、「経石」と呼称）が発見された（註2）。この連絡を受け、平成27年（2015年）1月16日及び1月26日～28日（実働4日）にかけて、基壇及び石室の測量調査を実施した。

神社の下部遺構は調査・報告例が稀少であるため、本稿においてその概要を報告する。

2. 地理的環境・歴史的環境

大門寺の周辺には、埋蔵文化財包蔵地として、西350mに大門寺古墳群、南東500mに地福寺遺跡（大阪府教育委員会2006）が所在する。また、北約2kmに山岳信仰の拠点であった竜王山と忍

頂寺が所在する（茨木市立文化財資料館2015）。

大門寺には、本尊の如意輪観音（1軀・11世紀）、四天王立像（4軀・12世紀）、熊野十二所権現立像（12軀・14世紀）、蔵王権現立像（3軀・14世紀）などが伝来する（茨木市史編さん委員会2008・大阪市立美術館・産経新聞社2017）。

また、平安時代後期から鎌倉時代にかけて書写された一切経（大門寺一切経）も伝来する。現在大門寺にはその一部（77巻）が存在し、大部分は奈良県大和郡山市所在の西方寺が所蔵する。一切経の奥書には、現在の京都府大山崎町から兵庫県尼崎市に至る淀川西岸域の寺院や村落、京都西

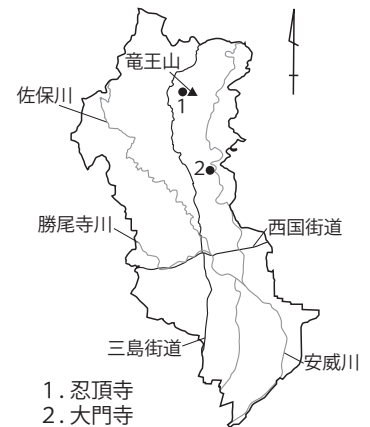


図1 関連寺院位置図

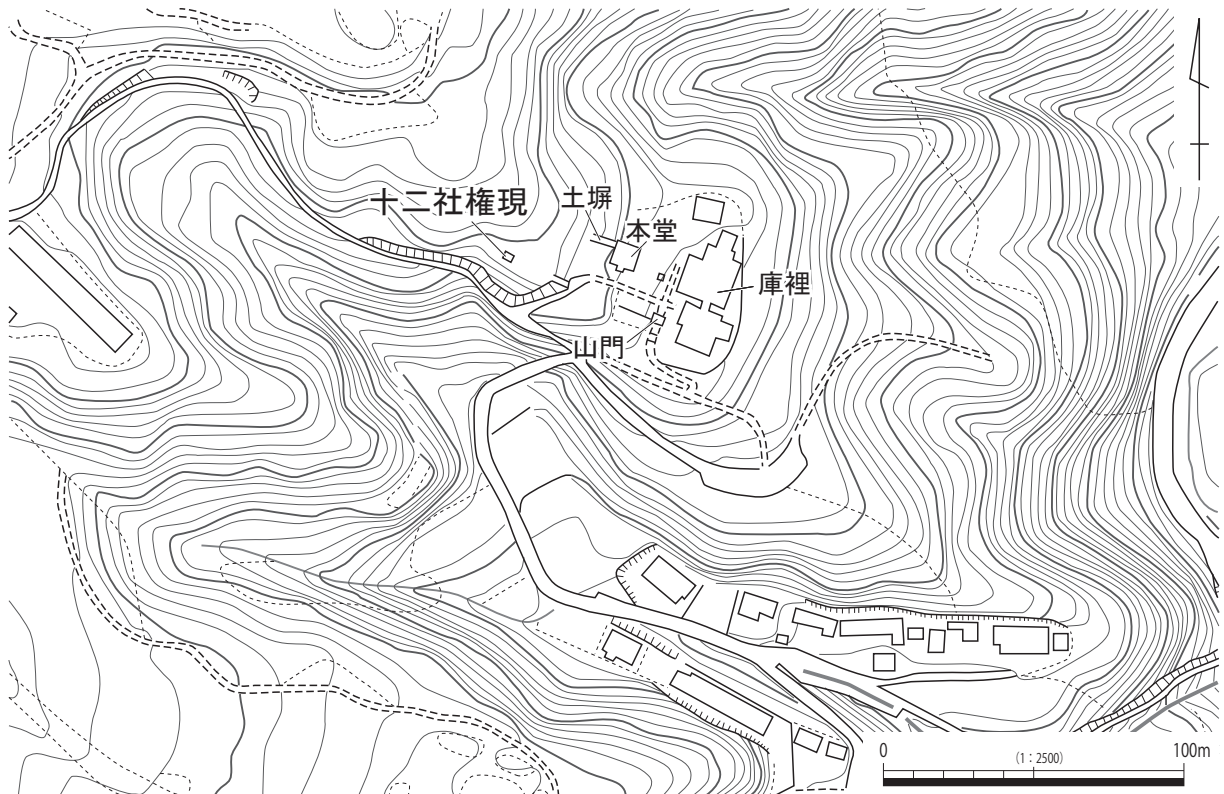


図2 大門寺境内図

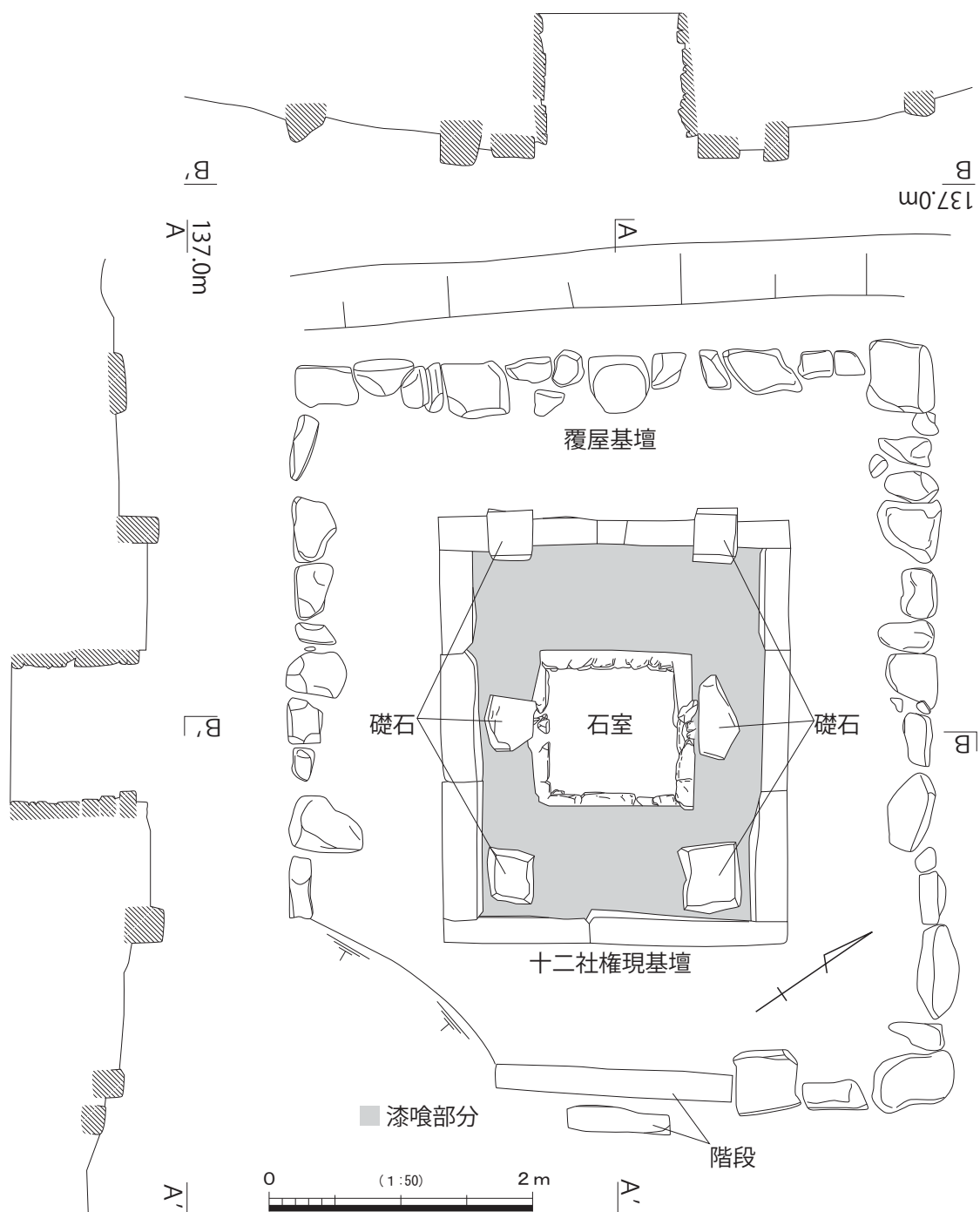


図3 十二社権現跡基壇平面図

山から北摂山系に点在する山岳寺院などの名称が登場する。これらを結ぶネットワークを背景として、一切経の書写が進められたことがわかる。(田中 1962、大和郡山市教育委員会 1984、梅木 2010、茨木市史編さん委員会 2012)

元弘年間 (1331 ~ 1334 年) の兵火で堂塔が焼失したと伝えられ、以降については実態を知りうる史料に恵まれないが、仏像や什宝には南北朝から江戸時代にかけて制作されたものも多く伝えられている (茨木市史編さん委員会 2008)。

現在の境内には、本堂、弁天堂、庫裡、客殿、

山門が所在する。また、境内西方に十二社権現が所在する (茨木市・茨木市教育委員会 1989)。

本堂は寛永 19 年 (1642 年) の建立である。石燈籠は承応 2 年 (1653 年) の年号をもつ。また十二社権現では、鳥居が明暦 3 年 (1657 年)、獅子・狛犬が天保 15 年 (1844 年)、石燈籠が宝暦 6 年 (1756 年) の年号をそれぞれもつ (茨木市・茨木市教育委員会 1999)。これらの年号から、1600 年代前半に境内が整備され、江戸時代を通じて随時石造物が追加されていたと考えられる。

近年は安威川ダム建設、府道茨木亀岡線の付け

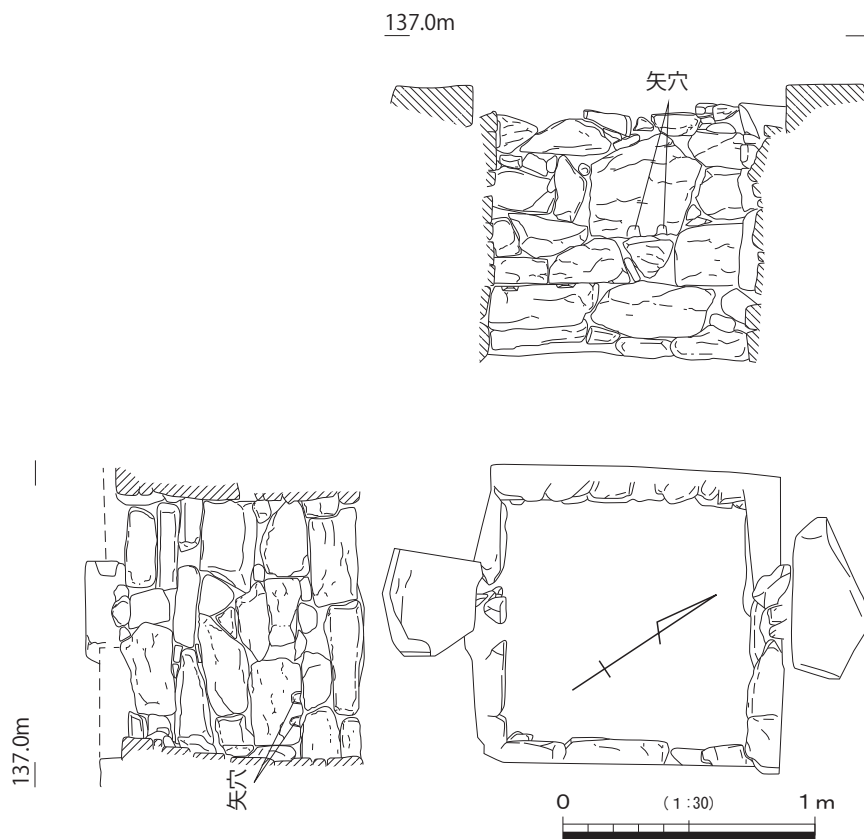


図4 石室平面・立面図

替え工事など大規模な土木工事が相次いで行われており、周辺環境は大きく変化してきている。

3. 調査の成果

調査開始時には、覆屋基壇、十二社権現基壇、基壇中央の石室が露呈し、開口した状態であった。調査では基壇平面図（1/100）・石室平面図（1/10）を作成し、立面図（1/10）作成のために石室底に堆積する土砂を取り除いて、遺物を採取した。遺構（図3・4） 覆屋の基壇は長辺 5.5 m、短辺 4.9 m の長方形を呈する。正面にあたる階段部分のみ切石を用い、他の部分は自然石を一段並べる。四隅には大形の石材を置き、その間には小形の石材とやや大形の石材を巧みに使い、一辺の長さを調整している。また、自然石を使用しながらも、自然平坦面を外面に配するなど、美的感覚を意識した造作を見てとることができる。大形の石材は、上面が平坦で、1 m ないし 2 m 間隔でほぼ等間隔で並ぶことから、柱が立てられていたと思われる。南側隅部は解体時に欠損しており、石材は残されていなかった。正面の階段北側の石は扉の礎石として使用されていたと思われる。

十二社権現の基壇は切石で構成され、間詰石として小振りの割石や自然石を用いる。覆屋の基壇

からは 0.3 m ほど高い。長辺 3.2 m、短辺 2.6 m ～ 2.7 m を測る。覆屋のプランに即して長方形を呈するが、奥側が 0.1 m 長い。基壇内部には漆喰を施し、礎石が 6 個（1 間 × 2 間）存在する。後列の 2 個は基壇奥側と兼ねる。

石室は基壇の中央に 1.2 m × 1.2 m（内法 1.0 m × 1.0 m）、深さ 0.95 m を測り、壁は石積みである。石材に矢穴（C タイプ・近世中頃以降、芦屋市教育委員会 2005、森岡・藤川 2008）が認められるものも存在する。底は土のままで、石などは貼られていなかった。遺物（図5） 石室内から、土師器皿 13 枚以上、施釉

土師器皿 6 枚以上、施釉陶器皿 1 枚、施釉燈明具 1 点、稻荷像頭部 1 点、墨痕・赤彩の認められる板材 1 点、「嘉永七〇」（1854 年）の墨書が認められる板材 1 点、銅板 1 枚、寛永通寶 2 枚が出土した。

土師器皿（1～13） 口径 7～8 cm 程度（1～6）と 10 cm 程度（7～13）のものがある。5～8 は底部外面に回転糸切痕が認められる。4・5 は口縁端部に油煙が付着し、6 は口縁端部に油煙、内面に煤が付着する。7・10・11 は内外面に煤が付着し、2 は外面に煤が付着する。13 は口縁端部に油煙、外面に煤が付着する。

灯明皿としての使用痕跡が確認できるものは 8 点だが、現状では煤の付着が認められないものも、灯明皿として使用された可能性がある。

施釉土師器皿（14～19） 口径 7 cm 程度（14～16）、9 cm 程度（17）、11 cm 程度（18・19）のものがある。いずれも口縁端部から内面にかけて、灯明油が浸み込むのを防ぐための透明釉を施す。14～16 は底部外面に回転糸切痕が認められる。14・16 は口縁端部に油煙が認められ、17・18 は外面に煤が付着する。

施釉陶器皿（20） 口径 7.2 cm を測る。口縁部外

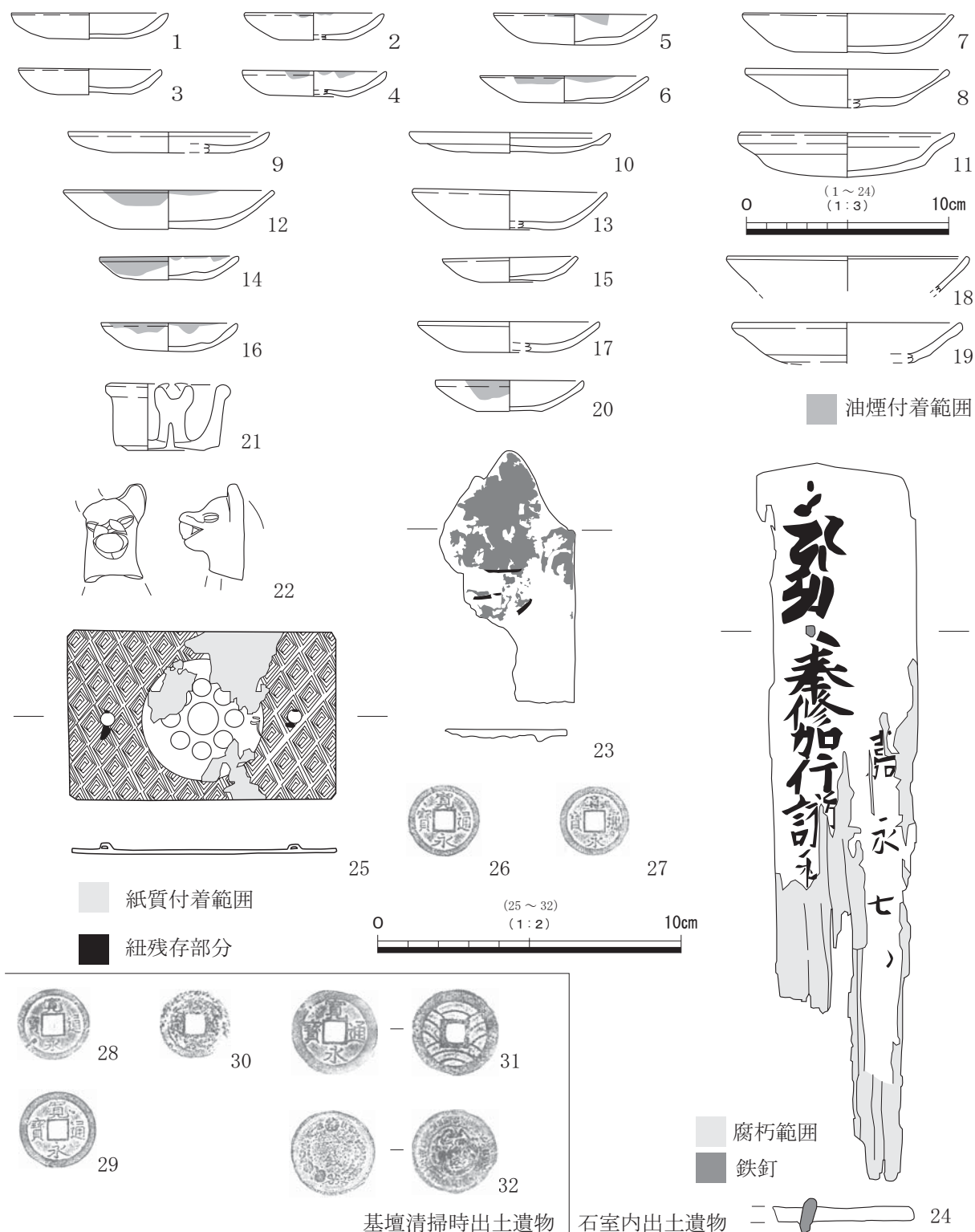


図5 出土遺物実測図

面から内面にかけて灰色釉を施す。外面は露胎であり、油煙・煤が付着する。

施釉土師器乗燭 (21) 口径 6.2cm、器高 3.2cm、底径 4.0cm を測る。底部外面以外に褐色釉を施す。中央に輪状の灯芯ささえをもつ。

稻荷像頭部 (22) は高さ 3.5cm を測る。口に珠を加えた狐の頭部である。右耳及び後頭部は欠損す

る。土師質で着色などは認められない。

土器類は、施釉土師器皿の出現時期が 18 世紀以降であるため、それ以降のものと考えられる。

板材 (23・24) 彩色・墨痕の認められる板材 (23) は長さ 12.2cm、幅 6.5cm が残存する。黄色の上に赤色で彩色しているようである。線状の墨痕が 3 本ほど認められる。墨書の施された材 (24) は

長さ 35.5cm、幅 7.5cm が残存する。墨書は「**奉修加行□□ 嘉永七□**」(1854 年) が判読できる。梵字はカンマンで不動明王を表す。梵字の下に鉄釘が打ち込まれており、建物の壁面などに打ち付けたのだろう。

銅板 (25) 長さ 5.5cm、幅 8.7cm、厚さ 0.2cm を測る。表面に半球状の突起を 2 箇所もち、上下方向に紐を通す。中央に直径 4 cm の円を描き、その中に九曜文を描く。九曜文の中には梵字が書かれているようだが、不鮮明で判読できない。おそらく九曜曼荼羅を表していると思われる。中央の円の外側は雷文で埋める。表面の一部と裏面の全体に紙質が付着する。用途は不明であるが、上下方向に紐が認められることから、何かに結びつけていたと考えられる。

寛永通寶 (26・27) とともに新寛永 3 期 (元禄 10 年 (1697 年) 初鑄) である (註 3)。直径 2.3cm を測る。なお、石室内出土遺物以外に、基壇の清掃時に出土した銭貨が 5 点存在する (28～32)。寛永通寶 (28・29・30) いずれも新寛永 (3 期) である。直径 2.3cm を測る。

寛永通寶四文銭 (31) 背面に 11 波の波紋が描かれる。直径 2.8cm を測る。明和 5 年 (1768 年) 初鑄である。

一銭銅貨 (32) 明治 10 年 (1877 年) の年紀をもつ。

4. まとめ

今回、大門寺境内十二社権現基壇の測量調査を

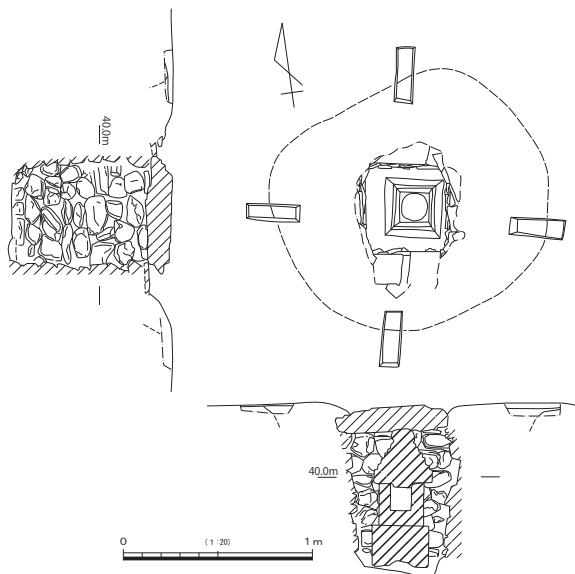


図 6 達磨寺本堂 石塔舞臺遺構平面・断面図
(王子町教育委員会 2005 図 39 再トレース・一部改変)

行った。

基壇のほぼ中央に石室が設けられており、石材に近世中頃以降から使用されている形態の矢穴が確認された。

これまでに建物の地下に石室を設けていることを確認できた例として、奈良県王寺町達磨寺本堂 (鎌倉時代・王寺町教育委員会 2005) と和歌山県和歌山市海禅院多宝塔 (江戸時代・(財)和歌山県文化財センター 1998) の 2 例がある。

達磨寺 (図 6) は、本堂の上面南寄りの位置に設けられ、板石で蓋がされていた。直径約 1.4～1.5 m の不整円形の掘形の中に、一辺約 50cm のほぼ正方形に構築されており、深さ約 80cm を測る。側壁は握り拳大から人頭大の花崗岩の自然石の乱石積みで、上端部のみ平瓦を 1～5 枚積み、石室の上端が水平になるよう調整されていた。内部に水晶製五輪塔形舍利容器を納めた石塔が置かれる。時期は 13 世紀代と考えられる。

海禅院多宝塔 (図 7) は、石室は塔内に設けられ、東西幅 2.1m、南北幅 1.64m、深さ 2.2m 以上を測る。石室内には『法華経』の「題目」を書写した経石がぎっしりと詰まる。石室は海禅院が所在す

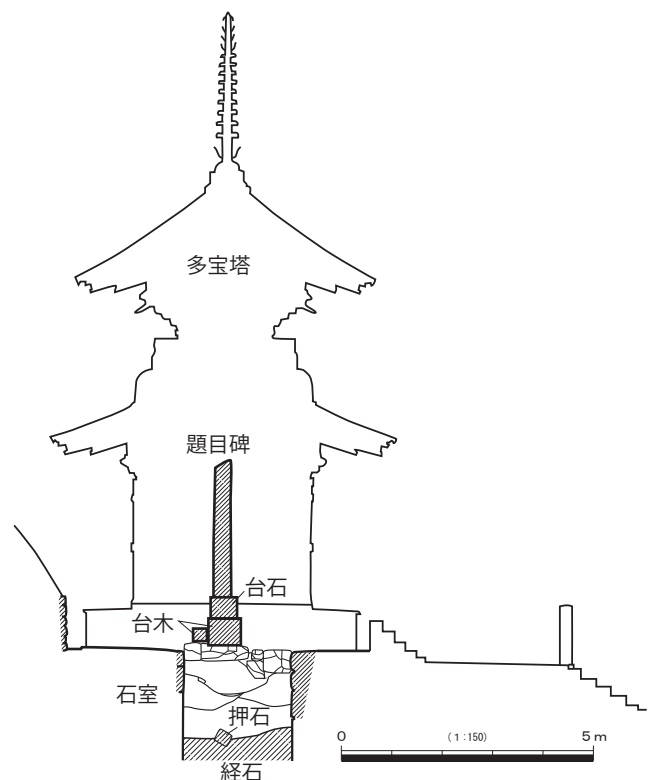


図 7 海禅院多宝塔断面図

((財)和歌山県文化財センター 1998 第 88 図再トレース・一部改変)

る妹背山の斜面の岩盤を穿って造られており、上部を平らにするために砂岩の切石を積み上げている。石室の上に台木と台石を渡し、題目碑を立てている。経石には慶安2年(1649年)の年号が書かれたものがあり、多宝塔は建築部材に明暦元年(1655年)の紀年銘が認められる。まず、経石を納めた石室と小堂が建てられ、後に小堂が多宝塔に改められたと考えられている。

2例には時期や地域に開きがあり、寺と神社という違いもあるが、石室は、内部に重要なものを納めるために構築されていることが共通する。十二社権現の石室も、その内部から見つかった「経石」を納めるために設置された可能性がある。

「経石」については、寺域または建物に対する地鎮を目的として書かれたと先に報告した(木村2016)。墨書には、「享保六」(1722年)の年号や仏の尊名、十二宮、二十八宿、北斗七星、九曜、祈願文などが認められる。

しかし、石室の構築年代については、矢穴の形式から判断した近世中頃以降とすることしかできない。それは、「経石」取り上げ後に残された土を除去する過程で取り上げた板材(24)に「嘉永七」(1854年)の年号が認められるためである。そのため、取り上げられた順番から、石室に「経石」以前に板材が入っていた可能性も捨てきれない。ただし「経石」の取り上げ時に攪乱された可能性もある。

石室には蓋は無かったようで、出土した灯明皿や木片などは使用後に廃棄されたと思われる。時間を経るに従って、当初の構築目的が忘れられ、廃棄の場となった可能性がある。

なお、他に仏堂及び社殿の床下に空間を設け、参籠空間としている例が滋賀県大津市日吉大社など複数存在することが確認されているが(黒田1999)、地下に施設を設けているものではないようで、本例とは性格が異なると考えられる。

以上のように、今回の測量調査結果から、建物の下に構築された石室と出土遺物について報告した。今後、類例の報告が増加すれば、十二社権現の例が特殊であるのか、普遍であるのか明らかになってくるであろう。

註

1) 今回測量を行った「石室」については、古墳の石

室(せきしつ)と区別するため、「いしむろ」と仮称している。ただし、後に述べる達磨寺例は「小石室」、海禅院例は「石室」と各報告書で記載されているが、読みについては記されていない。

2) 「経石」については(木村2016)において内容の概略を紹介した。

3) 貨幣の年代などは(兵庫埋蔵銭調査会1998)による。

参考文献(五十音順)

- 芦屋市教育委員会 2005『近世大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡』
- 茨木市・茨木市教育委員会 1989『わがまち茨木―神社・仏閣編―』 pp. 43・151
- 茨木市・茨木市教育委員会 1999『わがまち茨木―石造物編―』 pp. 7・16・27
- 茨木市史編さん委員会 2008『新修茨木市史 第九巻史料編美術工芸』 pp. 34-79
- 茨木市史編さん委員会 2012『新修茨木市史 第1巻 通史Ⅰ』 pp. 567-576
- 茨木市文化財資料館 2015『龍王山をめぐる信仰と人々―山岳寺院の軌跡―』
- 梅木謙周 2010「大門寺一切経にみる社会関係」『新修茨木市史年報』第8号 茨木市史編さん委員会 pp. 1-22
- 王寺町教育委員会 2005『達磨寺発掘調査報告書』
- 大阪市立美術館・産経新聞社 2017『木×仏像』
- 大阪府教育委員会 2006『桑原遺跡発掘調査概要』
- 木村健明 2016「大門寺所蔵「経石」について」『茨木市立文化財資料館館報』第1号 茨木市立文化財資料館 pp. 1-11
- 黒田龍二 1999「床下参籠・床下祭儀」『中世寺社信仰の場』思文閣出版 pp. 175-202
- 児玉義隆 1991『梵字必携』朱鷺書房
- 財団法人和歌山県文化財センター 1998『祈りの考古学』 pp. 161-179
- 田中塊堂 1962「大門寺一切経について」『日本歴史』第164号 日本歴史学会 pp. 68-75
- 兵庫埋蔵銭調査会 1998『近世の出土銭Ⅱ―分類図版篇―』 pp. 37・41
- 森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」『古代學研究』第180号 古代學研究会 pp. 405-418
- 大和郡山市教育委員会 1984『大和郡山市 西方寺所蔵一切経調査報告書』